

アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）2014 年度教育研究報告書

事業課題名	ライデン大学アジア学サマースクールへの学生派遣
代表者名	文学研究科教授・横地優子
事業概要 (600 字程度)	<p>ライデン大学が開催しているアジア学・言語学のサマースクールへの学生派遣。このサマースクールは、終了後の認定証の授与、終了後のレポート提出による単位の授与があり、学生を派遣するプログラムとしては質が保証されている。また、2 週間の集中方式のため、前期の授業と重なってはしまいが、学生には参加しやすい形であること、インド学やさまざまな印欧語言語学関係のコースがあり、複数のコースから一日に3または4の授業を選択できるため、学生が望む授業を選択することができる。おもに EU 諸国から学生・院生・ポスドク研究者が参加しており、若手研究者のネットワーク作りにも役立つ。授業(講読、翻訳、討議)はすべて英語で行われており、ライデン大学の受入基準(TOEFL80 点以上)を基本的に学生派遣の基準と考えている。専門学力については、学部の 4 年生以上が適当と考える。</p>
成果の概要 (800 字程度)	<p>2014 年度はインド古典学専修では適当な候補となる学生がいなかったが、言語学専修の博士課程の院生が派遣を希望し、サマースクールのレベルに十分な専門学力と英語力があると判断したため、当該院生を派遣した。</p> <p>この派遣学生はサマースクールにおいて、ホメーロスにおけるギリシア語、ヒッタイト語、およびトカラ語文献購読の授業に出席した。ホメーロスにおけるギリシア語の授業では Lucien van Beek 講師から古代ギリシア語の韻律の基本的な規則だけでなく、一歩進んだ韻律の制約および法則についても学び、さらにホメーロスにおいてそれがどのように反映されているか、またそれに適合するためにどのように語形式が創造または使用されているかを学ぶことができた。ヒッタイト語の授業については、派遣学生は既に指導教官の吉田和彦教授からヒッタイト語の基礎を習得していたため、ただ古い文献を読むだけでなく、ヒッタイト語から再構される印欧祖語の母音交代のあり方などについて、Alwin Kloekhorst 講師と授業の内外で充実したディスカッションを行うことができた。また、Michael Peyrot 講師によるトカラ語の文献読解の授業では、学ぶことができる機会が極めて限られているトカラ語 A・B 両言語について数個のテキストを集中的に読む事ができ、読解力をつけることができた。</p> <p>今回のサマースクール全体を通じて、派遣学生はさまざまな国からスクールに参加した院生・若手研究者とのネットワークを作り、それぞれの国の研究事情や研究環境、最新の潮流について知識を得る事ができた。また派遣された学生にとって、英語でのコミュニケーションスキルをより一層伸ばす必要性と、自身の専門分野について幅広く知識を習得する必要性を認識した貴重な機会であったことは間違いない。</p>